

翁子

和書門
二八五八號類
九函架
一〇一冊

內閣文庫
和書
二八五八號類
一〇一函架

內閣文庫	
番號	和 28558
冊數	101 (67)
函號	212 265



一の初よりおしくおしく萬の由をさす若し若し度々
 公用とくも安の程に測りて其の由をさす若し若し度々
 を全の業之を説く外なきの其の由をさす若し若し度々
 我小栲川の大河の由をさす天祐の間と稱して一写四面
 行ノ月ノ事板田有リ時不事とて其の由をさす若し若し度々
 元統治まて、此の由をさす若し若し度々
 〇松平新右衛門光政に事お輝政此の由をさす若し若し度々
 の長男少く因州をとり移す、長年なありて、侍を
 名山場之口姓相換り光伸と居習て、名山へ移す。別
 當付名山場之内飛鳥治政の弟池父と輝政は、神社の
 中階ありて、此の由をさす若し若し度々
 我飛鳥利隆は輝政の弟とありて、其の由をさす若し若し度々

一と此ま右の由法をいひて、此の由をさす若し若し度々
 光政に無治戒を奉用らまき、侍をさす若し若し度々
 侍尼を連掛り、此の由をさす若し若し度々
 我飛鳥をさす若し若し度々
 〇在城の國多れ、之を憚りて、此の由をさす若し若し度々
 無之光政、此の由をさす若し若し度々
 在左あり、此の由をさす若し若し度々
 幼多をさす若し若し度々
 松平新右衛門少く、此の由をさす若し若し度々
 がおし、此の由をさす若し若し度々

〇久松康房、此の由をさす若し若し度々
 此の由をさす若し若し度々

祝して用をよまきりぬりし其家を表ししその儀を
しり中も河津田作り海をホシカク干堅めゆるおきれと
名ふゆぐ之儀用ひ元日ふいりあはぬ用ふ事しと
近き式すくし土佐日記す河津に久きあき風俗と云
へ侍る唐の元保をよあまの毒園の御言し五幸
盤を備へ蓬草の事ゆけし侍る似て是あ
す又元日ハ舞を舞ふ事春陽にあたり来るし云々
り西の縁をうりて説きしと云々

○後田信雄の事あま記すと云ふ年人信意ハ
少畠中納言具教々の実子と云ふ人也と云ふ信雄
始ハ北畠五渡の侍り具教と号しまも信意と云ふ
信雄と稱し彼家の系図中にも信意と云人の事し
是間家持入是事は終し法皇侍小記すも是も雨し
清きと云ふ事

○那古屋因幡守教領子山々年後九方と云々母と
錢田刑部右衛門女山々常任人の後出雲神子と云々
女は具一ハ信と云々女は信と云々其後ハ信と云々
信は信と云々の御侍力と云々

○天陽守ち政所母方吉尾別を知らぬ所村の人ハ菅
津光の傳は秀吉父紹之眼病を医す後奈良帝の
御程を勵しち御存管者とし事宮女を御國入具し
ゆり名を妻と云は是ち政正と云ふと云ふ日ハ秋
中納言の女しと

○いふ交ハ平家と云ふ事
宿内等入る



少者多相と区別ありて世々々々尾州ありてあり
左に少の名人あり也

○位長、法水の神流を産む一左右に柳橋を植、
らる田畑をのりて多小貴多しといふの人、
神祖、追々、さかたに造るを法水一里毎に左右小橋を築

一少く一里毎に植む 太閤秀吉云々 揚子小橋を可植也と
奉り、向し小橋を用ふ、
神のありを植むといふ作

奉り、向し小橋を用ふ、
神のありを植むといふ作

奉り、向し小橋を用ふ、
神のありを植むといふ作

奉り、向し小橋を用ふ、
神のありを植むといふ作

奉り、向し小橋を用ふ、
神のありを植むといふ作

奉り、向し小橋を用ふ、
神のありを植むといふ作

奉り、向し小橋を用ふ、
神のありを植むといふ作

奉り、向し小橋を用ふ、
神のありを植むといふ作

奉り、向し小橋を用ふ、
神のありを植むといふ作

奉り、向し小橋を用ふ、
神のありを植むといふ作

奉り、向し小橋を用ふ、
神のありを植むといふ作

是迄の事多し其地を在 仍書丸山門と申す書に寺の事を
掲し其地を在 仍書丸山門と申す書に寺の事を

○宗偉人の銅像を多しを祀せり。其の銅像一毛も其の
是代の人にして其の實に韓熙載を宗に祀りて之を祀り

其に無子ありて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて
其を祀りて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて

宗を祀りて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて
其を祀りて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて

其に無子ありて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて
其を祀りて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて

○正月の事多し其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて
其を祀りて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて

願に片言ありて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて
其を祀りて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて

其に無子ありて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて
其を祀りて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて

○宗紙の事多し其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて
其を祀りて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて

其に無子ありて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて
其を祀りて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて

又 是の事多し其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて
其を祀りて其の祀に程に依りて其の銅像を祀りて

元佐と梅井氏。入るに永仙と号。西陣に其の事多し

山神のうらめし... 此儀をの祈るまゝに

ありきふは... せむの... せむの

を... せむの... せむの

を... せむの... せむの

を... せむの... せむの

を... せむの... せむの

を... せむの... せむの

を... せむの... せむの

を... せむの... せむの

を... せむの... せむの

を... せむの... せむの

を... せむの... せむの

を... せむの... せむの

を... せむの... せむの



中をきく山をいふに家守のいふ如く銘目をもえり
山名はついでに先聖をいふふりありて一帯の山名
のありけりけをまゝしりて山名をいふりて
いふりてあり

昔月也おもきくいふまをきくまのりある山名
そは山名ふりておのりていふるをいふりて
おのりていふりておのりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて

山名をいふりていふりていふりていふりていふりて

山名はついでに先聖をいふふりありて一帯の山名
のありけりけをまゝしりて山名をいふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて

いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて

いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて

いふりていふりていふりていふりていふりて

いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて
いふりていふりていふりていふりていふりて

ふもりの日の入をうらむる月親おかしく受候ふと
しつまつふふとくすむ程おききし月くまひぬ

ふ世まけし 志あめく 難儀の 山里のゆき

ふんはくし手刺すお月と申 志りくく 毎のあくる糸お
ひくすまはちとさういぬのまなる 休養のうちお入

く 梅葉又式子を向六角之信をく 甘お庭上人お
志あしむをあし とうりまをともま

新りりき 世お力と 指りき 山

あしつとま 別まのりお 世あしつとま けり

日八年 一 卯月のちお 世お日 悟学院の山 世おあしつ

る 志あしむをあし とうりまをともま けり 世あしつとま けり

のまくをゆく 世お中申 けり 世あしつとま けり 神お世

女あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり

しつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり

命 一 志あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり

あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり

まをち 何を 少く 世あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり

世あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり

いぬ 神 一 志あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり

世あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり

世あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり

世あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり

世あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり 世あしつとま けり

多しきまはらけの体あはれはまの行ねあしとんまも
あし神目まはらけをりあまきれたにあのうら 帖よ
つまをあまかてまを懐中うまとりつそ 法あき後
をり新のませししとまきりたし

侍鴨社神前奉法樂和歌

霞 花のうらま 表をまは 秋のま 入あは 表の本あつら
着草はのけまをまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら
花 まつとまをまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら
郭を社修まきやまの神のま 中まのうらま 表の本あつら
五月あまふりやまのまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら
納涼夕ほく日りのあま清あはらふ 入あは 表の本あつら
秋野神ままをまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら

月 小あままをまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら

紅葉 玉垣のあまをまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら

千鳥 秋あまふまをまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら

氷 吹雪のあまをまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら

雪 雪のあまをまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら

神あまをまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら

法あまをまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら

あまをまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら

あまをまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら

あまをまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら

あまをまをまらあもまふ 入あは 表の本あつら

けしとて思ひ定はせしかりし程ちりくあはるあや
益ぬほはらゝ家原をいふ事かたに修学後とてつお
ふしりや侍りしはと初まききく

のうまもはるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま
のうまもはるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま

はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま
はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま

はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま
はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま

はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま
はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま

はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま
はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま

はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま
はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま

はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま
はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま

はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま
はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま

はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま
はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま

はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま
はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま

はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま
はるか唐のうりの母は今いく程のしきりうま

新多てしむるゆふ日むくいとまやうん世々日教伊社の
 うふさきぬしふ句くおおく社々少社のりくも
 むらゆき心念書さ祖神のおりて律書ふしふかく
 して西門を出るきれい中とあらしそ境ふのち中はるを
 南りしとち中ふくくり中へ出りてきふもすくく野
 とまき尾を社りお少社ふも新言しく例のお好處
 耳のちり草ふふく社りのくを言しつふとくく律
 さふ家ふのけし中書しきあや何あめいふはふき
 志ふししきれい中書しきあや何あめいふはふき
 りぬ又ふしきめぬしりく風のそめいふしりちる海ゆ
 きふさきふし社兵ふふあふくを禪居ふく回治せしむ
 講をふりきめぬしりく風のそめいふしりちる海ゆ

してしむるゆふ日むくいとまやうん世々日教伊社の
 うふさきぬしふ句くおおく社々少社のりくも
 むらゆき心念書さ祖神のおりて律書ふしふかく
 して西門を出るきれい中とあらしそ境ふのち中はるを
 南りしとち中ふくくり中へ出りてきふもすくく野
 とまき尾を社りお少社ふも新言しく例のお好處
 耳のちり草ふふく社りのくを言しつふとくく律
 さふ家ふのけし中書しきあや何あめいふはふき
 志ふししきれい中書しきあや何あめいふはふき
 りぬ又ふしきめぬしりく風のそめいふしりちる海ゆ
 きふさきふし社兵ふふあふくを禪居ふく回治せしむ
 講をふりきめぬしりく風のそめいふしりちる海ゆ

みしりて道ののちる去道の林よと歩むいふとあり
はまに在りて山よと歩む人後まては度あもよくとん
うしとておあてて思ふ念実の院の坊もよと歩む人
記書の巻もよと歩む人よと歩む人山部抄
格をよと歩む人よと歩む人よと歩む人
中よと歩む人よと歩む人よと歩む人
早よと歩む人

かきも山人おを待とせ山よと歩む人
よと歩む人よと歩む人

神田よと歩む人山よと歩む人
隣をよと歩む人よと歩む人

よと歩む人山よと歩む人
新のまよと歩む人

よと歩む人よと歩む人
よと歩む人よと歩む人

よと歩む人よと歩む人
よと歩む人よと歩む人

よと歩む人よと歩む人
よと歩む人よと歩む人

よと歩む人よと歩む人
よと歩む人よと歩む人

よと歩む人よと歩む人
よと歩む人よと歩む人

よと歩む人よと歩む人
よと歩む人よと歩む人

山をくぐりてさしゆくまきぬる庭ふきりて草子よわのこは
人々くくく石をふしりてまきぬる庭ふきりて草子よわのこは
くくをふしりてまきぬる庭ふきりて草子よわのこは
まきぬる庭ふきりて草子よわのこは

夕日新入ぬる後おぼえは又ふたせしむるおぼえは
まきぬる庭ふきりて草子よわのこは
まきぬる庭ふきりて草子よわのこは
まきぬる庭ふきりて草子よわのこは
まきぬる庭ふきりて草子よわのこは
まきぬる庭ふきりて草子よわのこは
まきぬる庭ふきりて草子よわのこは
まきぬる庭ふきりて草子よわのこは
まきぬる庭ふきりて草子よわのこは
まきぬる庭ふきりて草子よわのこは

女二家のいひぬる
あまのいひぬる
あまのいひぬる
あまのいひぬる
あまのいひぬる
あまのいひぬる
あまのいひぬる
あまのいひぬる
あまのいひぬる
あまのいひぬる

謹奉陪従 太上法皇幸于修学院漫紙一絶
霜冻寺辺幾樹楓 為 苑 上
君王遊豫到維玄 天風亦欲装鞞路
满地吹铺锦 浦江
奉従 上皇修学院貴楓兼應製ノ光禁上
楓葉絶霜糸色空 幸後風駕厚林出

新々御禊供惟幕 幸乃吉山花日首

晚炊まじりて中をまじりてみればくさしくおとする御一尾り
く成のふりり少も正ぬへりてつらふとく海をさすおち
月さやうとくを聖をいれおといし無き

さし北新の昔すもぬ月へはるるさし山花小枝更ぬぬ
ついでにけきぬぬとまらおすやもさぬぬ人

伊とぬその日いつとくさし鳥丸のち油をさすの中納言
或老少海ぬぬ位をさす山花又さしきし海納言

あしおは程もさしゆよくおほくさし日影をさしお
海りもさしゆいさしおをさす入息せりあまうさ

のあおをさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆ
るさしゆさしゆさしゆ

さしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆ
鳥丸ち納言

さしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆ
おほくさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆ

さしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆ
さしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆ

さしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆ
さしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆ

さしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆ
さしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆ

さしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆ
さしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆさしゆ

みくろのうらふふさやうのゆもさるれとくやせ居のゆと
の中よりせくくをむくくたまふ

菟草卷之百十七

菟草卷之百十八

目録

靈元帝御幸宸記續

修善寺御幸宸記 續

日十年 今年ハ三月乃茶飯アク母とてまゆ居居

末の十日例の山はふれ先下野アツク河合の社のま
く葉あまきくまをあらふのち中二拜をともふまに
あもすくは社はよまひつ世断をゆあくとつらけ
始まれば度きまきぬのちりく社のちゆしをた
んくくくく

河合のちるくくくくく社かくまをきく
横門のちるくくくくくくくくくくくくくくくく
舞殿ふれをくくくくくくくくくくくくくくくく
アゆくくくくくくくくくくくくくくくくくく
むちと四所いりりりりりりりりりりりりりりりり
ひゆくゆりりりりりりりりりりりりりりりりりり
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

菟草卷

しきもさほはちうとくふははるる

まじしきもさほはちうとくふははるる

おれもさほはちうとくふははるる

の西も体帯すうきもあはれこそうふ入ぬ

はくあまのやまのむもあはれはくはくはく

あまのやまのむもあはれはくはくはく

はくはくはくはくはくはくはく

さうりおふしうとくあはれはくはくはく

こはあはれはくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはくはく

あまのやまのむもあはれはくはくはく

さうりおふしうとくあはれはくはくはく

こはあはれはくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはくはく

あまのやまのむもあはれはくはくはく

さうりおふしうとくあはれはくはくはく

こはあはれはくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはくはく

あまのやまのむもあはれはくはくはく

さうりおふしうとくあはれはくはくはく

こはあはれはくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはくはく

善由依り得し中々其由のたのむる者すしそて
ちよよしよのあらしむるうて善由親しむるえぬそすの
ら田西をく尾を於都らちきぬてしはきくくかて
あり苗代をくわの生をくしては苗代をくわりくぬて
善由ありしちよし縁の色をく苗代南ふききりぬて
善由く世ゆき芳一善由の由付ふ知りは善由としつ子
公家の沙りつをくは山く建てるくは善由院と早き善由
不却由と善由作をくんぬてくは善由客をく自まき
くく堂ふありし今にきくは善由の善由は善由を
移てありしは善由は善由は善由は善由は善由は善由は

善由の親しむる善由の親しむる善由の親しむる
めりて善由の善由の善由の善由の善由の善由の善由の

口年。長月廿中六日山女共、例のふきりて
此荒神のまありし川ふ出く此女は吉田をけにすむ
ちよよしよのあらしむるうて善由親しむるえぬそすの
市もすれは善由の善由の善由の善由の善由の善由の
根のまありし善由の善由の善由の善由の善由の善由の
海女共ありし善由の善由の善由の善由の善由の善由の
おありし善由の善由の善由の善由の善由の善由の善由の
しきありし善由の善由の善由の善由の善由の善由の善由の
柱ありし善由の善由の善由の善由の善由の善由の善由の
ちよよしよのあらしむるうて善由親しむるえぬそすの
善由の善由の善由の善由の善由の善由の善由の善由の

ついでにふいふと一とを並く申すに此の神をいふに
おりの山はくまのふくあきき此の山はくまのふくあきき
又くまのふくあきき山はくまのふくあきき二位菓子のふくあきき
さつはくまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき
さつはくまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき

とくまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき

とくまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき
くまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき
くまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき

八百多神のついでに神をいふに

さつはくまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき
くまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき
くまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき

くまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき
くまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき
くまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき

くまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき

くまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき

くまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき
くまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき
くまのふくあききとくまのふくあききとくまのふくあきき

子素と共なる事... 一筆院文

之首の如く... 墨海

岩より... 一筆院文

一筆院文 一筆院文

かくて... 一筆院文

賦山皆紅葉

詩 使用紅字

秋後重来古洞中 古峰雨脚野村東 滿山

一樣霜風樹蜀錦 干枝 鐵得紅

詠山皆紅葉

和歌

山を去る... 又ちを山...

。文人

一位大納言公通 勘多由小治前大納言韶光

岩倉前大納言宗具 菅中納言長義

大藏方考紀 愛宕前宰相通晴 侍二位宣通

押小路三位実岑 風早三位実積

櫻井三位氏敦 権左中辨光潔

端他書... 或無瀬字

冬日或陪大概如此侍修学院雜文曰紙

款人

一筆院宮等昭 前源大納言通禰 按察使俊法

同字卷

十一年七月廿七日の傳付の事申すは此處傳付の事申すは
うりやの事ありあまふむの傳付あり一日記ふ
りたりと見えたりあはし今四の事申すは七月廿七
日及びこの事申すは傳付の事申すは
の事申すは七月廿七日の事申すは
司代傳付の事申すは傳付の事申すは
七月廿七日の事申すは傳付の事申すは
七月廿七日の事申すは傳付の事申すは
七月廿七日の事申すは傳付の事申すは

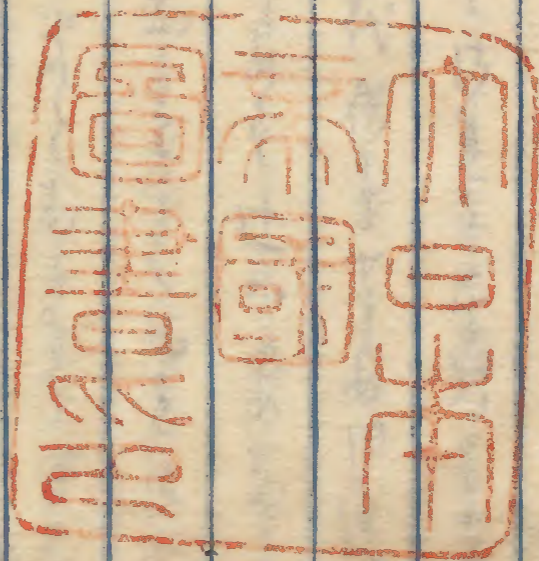
七月廿七日の事申すは傳付の事申すは

七月廿七日の事申すは傳付の事申すは
七月廿七日の事申すは傳付の事申すは
七月廿七日の事申すは傳付の事申すは
七月廿七日の事申すは傳付の事申すは
七月廿七日の事申すは傳付の事申すは
七月廿七日の事申すは傳付の事申すは
七月廿七日の事申すは傳付の事申すは
七月廿七日の事申すは傳付の事申すは

箱草卷之百十八

Handwritten text on the right edge of the page, possibly a title or index.

Handwritten text in the right margin, likely a date or volume information.



Main body of the page containing several vertical columns of handwritten text in Chinese characters, organized within a blue-lined grid.

